

# 感情を表わす動詞・形容詞に関する一考察

大 曾 美 恵 子

## 0 . はじめに

日本語には「悲しい」「寂しい」「嬉しい」「いや」「悲しむ」「喜ぶ」「驚く」のように感情を表わす一連の語がある。これらの語は品詞的には形容詞と動詞に分かれる。

寺村(1982:139)は、感情表現は動的事象の客観的な描写と事物の性状規定との中間に位置すると考えられると述べている。つまり、感情表現には「驚く」「かっとなる」のように外面的に観察可能で客観的に描写できる感情を描くものと、「おそろしい(伝染病)」「ばかばかしい(話)」のように感情をもとにした主観的な性状規定、判断を表すものが存在する。通常、動的事象の客観的な描写には動詞が、事物の性状規定には形容詞が使われる<sup>(1)</sup>とすると、感情表現の場合も前者が主として動詞によって、後者が形容詞によって表現されると考えられる。寺村(1982)では、このような感情表現の形態的、統語的、意味的特徴が取り上げられ、考察されている。この小論では更により多くの感情表現を考察し、感情表現を巡る興味深い言語事実を明らかにし、その特異な性質の解明につなげていきたいと考える。

## 1 . 感情表現とその主体に関する制限

### 1 .1 形容詞の場合

日本語の感情及び感覚を表わす形容詞には次のような主体に関する制限があることはよく知られている。次の例(1)(2)に見られるように、感情形容詞を述語とする平叙文の主体は話し手であり、質問文の主体は相手になる。そして(1)(c)、(2)(c)が示すように第3者は感情形容詞の主体にはならない。

- (1)(a) 私は嬉しい。<sup>(2)</sup>  
(b) 嬉しいですか。  
(c) \*彼は嬉しい。<sup>(3)</sup>
- (2)(a) 私は寂しい。  
(b) 寂しいですか。

- (c) \*彼女は寂しい。

## 1.2 動詞の場合

寺村 (1982 : 151) は「思う」「困る」のような動詞にも次の例 (3) (4) のように感情形容詞と同じ主体に関する制限があることを指摘している。

- (3) (a) オーストラリアは暮らしやすい所だと思う。  
(b) \*彼はオーストラリアは暮らしやすい所だと思う。  
(4) (a) 子供がちっとも言うことを聞いてくれないので困る。  
(b) \*彼女は子供がちっとも言うことを聞いてくれないので困る。

「いらいらする」「はらはらする」「ひやひやする」「わくわくする」のような擬態語から派生した感情動詞も次の例 (5) (6) で示すように「思う」「困る」と同じ主体に関する制限がある。<sup>(4)</sup>

- (5) (a) 彼の煮え切らない態度にはいらいらする。  
(b) \*彼女は彼の煮え切らない態度にはいらいらする。  
(6) (a) (劇場で幕の開くのを待ちながら) なんだかわくわくする。  
(b) (上記と同じ状況で) \*花子はなんだかわくわくする。

この他「腹が立つ」「胸が痛む」「胸が躍る」のような感情表現の動詞句にも同じく主体制限がかかる。

- (7) (a) 電車の中で騒がしい子供たちを見ると腹が立つ。  
(b) \*電車の中で騒がしい子供たちを見ると父は腹が立つ。  
(8) (a) 地震の被害のニュースには胸が痛む。  
(b) \*母は地震の被害のニュースには胸が痛む。  
(9) (a) 祭りのたいこの音を聞くと胸が躍る。  
(b) \*父は祭りのたいこの音を聞くと胸が躍る。

## 2. 第 3 者の感情の表現

### 2.1 「- がる」の使用

それでは、第 3 者の感情はどのように表現されるのだろうか。感情主自身が自分の感情をことばで表出することにより、他の人に伝達された場合には、次の (10) ~ (12) のように接尾辞「- がる」を付加した動詞を使って表現される。

- (10) 母は弟から便りがないのを寂しがっている。

(11) 兄はアメリカでの生活をなつかしがっている。

(12) 俊介は陽子に会えなかったのを残念がっている。

発話現在時における感情の描写であれば、上のようにアスペクト「- ている」を使って表現されることになる。

## 2.2 「- む」 / 「- する」の使用

しかし、すべての感情形容詞が接尾辞「- がる」を取るわけではない。「心配な」(「\*心配がる」)「楽しい」(「\*楽しがる」)のように「- がる」と共起しない形容詞もある。その場合、第三者の感情はどのように表現されるのであろうか。

「心配な」「楽しい」など「- がる」と共起しない形容詞には接尾辞「- む」あるいは「- する」を持つ動詞(「楽しむ」「心配する」)が存在し、それらが第3者の感情表現に使われる。<sup>(5)</sup>

(13) (a) あしたの天気が心配だ。

(b) 妹はあしたの天気を心配している。

(14) (a) 私は勉強が楽しい。

(b) 妹は勉強を楽しんでいる。

形容詞によっては接尾辞「- がる」の付加を許す一方、接尾辞「- む」で終わる動詞も持つものがある。次に「- がる」の付加を許すかどうか、「- む」動詞があるかどうかによって、感情形容詞を2つのグループ(A)、(B)に分けて示す。

(A) 憎い	憎む	*憎がる
楽しい	楽しむ	*楽しがる
心配な	心配する	*心配がる
ねたましい	ねたむ	*ねたましがる
(B) 悲しい	悲しむ	悲しがる
なつかしい	なつかしむ	なつかしがる
うらやましい	うらやむ	うらやましがる
苦しい	苦しむ	苦しがる

グループ(A)の形容詞は、「- がる」と共起しないため、第3者の感情表現には接尾辞「- む」を持つ動詞が使われる。(B)のグループには「- がる」の付加によって生まれた動詞に加えて、「- む」で終わる動詞が存在する。そして次の例に見られるようにこの2種類の動詞が使い分けられているのが分かる。

(15) 最近の学生があまり本を読まないのは{悲しむべき / \*悲しがるべき}ことだ。

(16) ふる里の町を歩いていたら、幼馴染みが{なつかしがる / \*なつかしんで}声

をかけてきた。

(17) 昔はやった歌を { なつかしむ / \* なつかしがる } 集いが開かれた。

(18) 花子は私のフィアンセを見て { うらやましがった / \* うらやんだ }。

「- がる」が話し手によって捉えられた特定の人物の感情表出の描写 ((16) (18)) に使われているのに対し、「- む」は感情の表出の描写というより、事物の性状規定、つまり感情的品定め ((15) (17)) に使われるようである。しかし、使い分けの要因を特定するにはもう少し多くの用例を考察してみる必要がある。

さて、(B)の最後の「苦しい」に関しては「苦しがる」と「苦しむ」で明らかに意味用法に違いがある。次の例 (19) ~ (21) を見ると、「苦しがる」が感情というより肉体的苦痛の訴えを表わしているのに対し、「苦しむ」は精神的苦痛の表現にも肉体的苦痛の表現にも使えると言えそうである。しかし、(19)の「苦しむ」が不自然なことを考えると、この二つの使い分けを明確に記述するには更に多くの用例を考察する必要がある。

(19) 帯をきつく締めようとしたら、子供は { 苦しがって / \* 苦しんで } 泣き出した。

(20) これ以上、彼を責めないでほしい。彼は十分に { 苦しんで / \* 苦しがって } いる。

(21) 手術の後、父が { 苦しがる / 苦しむ } のを見るのはつらかった。

また、次のように関連すると思われるが、部分的にしか意味を共有しない形容詞、動詞もある。

恥ずかしい 恥じる

悔しい 悔やむ

恨めしい 恨む

「恥ずかしい」が内気な性格から人前に入るのをいやがるようなときにも使われるのに対し、より深刻で、罪の意識を伴うような場合は「恥じる」が使われる。「悔しい」には自分の受けた挫折感、敗北感、屈辱感などをもとに、雪辱を果たそうという前向きの意識が感じられるが、「悔やむ」は自分の失敗に対する後悔しか表わさない。「恨む」がひどい仕打ちをした人に対する復讐の念を含むのに対し、「恨めしい」は自分に被害を加えた人や事態に対するマイナスの気持ちを表わすのみで、仕返しのような積極的行為を含まないように思われる。これら類義語の意味の違いに関しては更に詳細な考察が必要である。

上記ペアのように形容詞と語幹を共有する動詞に意味的なずれがある場合は、次の例 (22) (23) で示すように形容詞と同じ意味の第 3 者の感情の描写には「- がる」形が使われることになる。

(22) (a) 水着姿を見られるのが恥ずかしいから、海へは行かない。

- (b) 花子は水着姿を見られるのを { 恥ずかしがって / \* 恥じて } いる。
- (c) 昌子は自分がうそをついたのを { 恥じて / \* 恥ずかしがって } いる。
- (23) (a) 試合に負けたのが悔しくて仕方がない。
- (b) 宏は試合に負けたのを { 悔しがって / \* 悔やんで } いる。
- (c) 勝利は試験の前に勉強しなかったのを { 悔やんで / \* 悔しがって } いる。

## 2.3 「- ている」の使用

「思う」「困る」「いらいらする」「はらはらする」のような感情動詞の場合、第3者の感情の表現には次のように「- ている」というアスペクトを使う必要がある。

- (24) 彼は私がうそをついたと思っている。
- (25) 彼女は仕事がなく、困っている。
- (26) 太郎は終わりそうにない会議にいらいらしている。
- (27) 花子は子供が間違えるんじゃないかとはらはらしている。

## 2.4 他動詞の使用

「腹が立つ」「胸が痛む」など、自動詞を持つ動詞句の場合、第3者の感情の表現には次の例に見られるように対応する他動詞が使われる。

- (28) 電車の中で騒ぐ子供たちを見ると、父は腹を立てる。
  - (29) 太郎は引き取り手のないペットの話に胸を痛めている。
- (29) の場合は、「- ている」というアスペクト表現も必須となる。2.3、2.4 で指摘した客観性とアスペクト、客観性と動詞の自他の関係は、更に追求していく価値のある問題であると思われる。

## 3. 感情的品定めに使われる感情表現

寺村 (1982 : 151 - 152) は感情形容詞が感情主による感情の直接表出だけでなく、次のように事物の感情的品定めとも言うべき性状規定に使われる場合もあることを指摘した。

- (30) 雷はこわい。
- (31) 一人で暮らすのは寂しいものだ。

多くの感情動詞は (32) ~ (34) に見られるように接尾辞「- べき」を伴って、感情的品定めに使われる。

(32) 驚くべき事実が次々に明らかになっている。

(33) 日本経済は大いに憂慮すべき事態にある。

(34) 海外で活躍するスポーツ選手が増えたのは喜ぶべきことだ。

感情動詞の受身形も (35) ~ (37) のように感情的品定めに使われる。

(35) 彼の50歳の若さでの引退は惜しまれる。

(36) 行政の適切な対応が望まれる。

(37) しつこい男は嫌われる。

#### 4 . 文副詞としての用法

感情形容詞、感情動詞共に「～ことに」の形で文副詞を構成し、その文の命題に対する話し手の感情を表す。この場合言語的に表現はされないが、感情の主体は常に話し手であり、第三者であることはない。

(38) 嬉しいことに娘がアメリカへ連れていってくれるというんです。

(39) 驚いたことに彼女は私と同じ小学校を卒業しているんです。

(40) 残念なことにあの計画は白紙にもどったそうだ。

#### 5 . 使役表現

次に感情表現の形容詞、動詞を含む使役文を検討する。

##### 5 .1 感情動詞の使役文

寺村 (1982) は共起する格助詞の違いによって感情動詞を二つのグループに分けている。下に示すように感情の動きの誘因を二格で示すものと、感情の向う対象をヲ格で示すものの2類である。

に	びっくりする	を	憎む
に	うんざりする	を	喜ぶ
に	がっかりする	を	悲しむ
に	ほっとする	を	楽しむ
に	あきれる	を	後悔する

どちらの類に属する動詞も (41) ~ (44) にあるように使役者を主体にし、感情の持ち主を対象とする使役文を作ることができる。

(41) 兄が試験に落ちたという知らせは母をがっかりさせた。

(42) 妹の手術の成功は母をほっとさせた。

(43) 兄の出世は父を喜ばせた。

(44) あのドラマは大人を楽しませてくれた。

通常、日本語の使役文の主体は次の例(45) (46)で示すように有生物であって、無生物を主語とする使役文(47) (48)は成り立たない。<sup>(6)</sup>

(45) 先生は喧嘩をした子供を教室の後ろに立たせた。

(46) あまり暑いので、お母さんは子供たちをプールへ行かせた。

(47) \* 自分たちのした喧嘩が子供を教室の後ろに立たせた。

(48) \* あまりの暑さが子供たちをプールへ行かせた。

この点から見て、(41) ~ (44)のように無生物を主体として取る感情動詞の使役文は日本語では特殊であると言える。

感情動詞の使役文は(49) ~ (51)のように受身文にすることができる。

(49) 真夜中の電話にびっくりさせられた。

(50) 課長の長々しいお説教にはいつもうんざりさせられる。

(51) 総理大臣の所信表明演説にはがっかりさせられた。

面白いのはこれら使役受身文で表現されていることは、次のように感情動詞そのものを使って言い表わすことができるということである。

(49') 真夜中の電話にびっくりした。

(50') 課長の長々しいお説教にはいつもうんざりする。

(51') 総理大臣の所信表明演説にはがっかりした。

(49) ~ (51)と(49') ~ (51')の間にはどのような違いがあるのだろうか。

後者が感情そのものの表現に重点をおいた表現であるのに対し、前者は感情の原因にウエイトが置かれているように思える。<sup>(7)</sup> これは次の(52) ~ (54)で見られるように感情の誘因まで考えず、その発露を瞬間的にとらえて表現する場合に、使役受身文が不適切であることから分かる。

(52)(a) ああ、びっくりした。

(b) \* ああ、びっくりさせられた。

(53)(a) 今日はなんだかいらいらする。

(b) \* 今日はなんだかいらいらさせられる。

(54)(a) もういやだ。うんざりする。

(b) もういやだ。\*うんざりさせられる。

次の例に見られるように感情そのものの表現に焦点のある文においても使役受身は不自然である。

(55) A : きのうのニュースを聞いて、どう思いましたか。

B : 正直言って、{びっくりしました / ??びっくりさせられました}。

(56) A : 黒沢の新しい映画はどうでしたか。

B : あんまり良くなかったですね。ちょっと{がっかりしました / ? ? がっかりさせられました}。

もう一つ、興味深いのはヲ格をとる感情動詞が(57)(58)で示すように、使役受身文にならないということである。

(57) \*父は兄の出世に喜ばされた。( 兄の出世は父を喜ばせた。)

(58) \*大人はあのドラマに楽しませられた。( あのドラマは大人を楽しませた。)

なぜ二格をとる感情動詞しか使役受身文を構成することができないのかは現時点では不明である。今後の課題としたい。

## 5.2 感情形容詞の使役文

本節では感情形容詞の使役文について考察する。感情形容詞ではなく、事物の一般的属性を規定する形容詞の使役的意味(人がある状態を引き起こす)は(59)(60)のように、形容詞の連用形+「する」で表す。しかし、感情形容詞の場合は(61)~(63)で示すように連用形+「する」を使うことができない。

(59) 私は部屋を暗くした。

(60) スカートを短くしてください。

(61) \*太郎の留学は母親を寂しくした。

(62) ?? 音楽は人を楽しくする。

(63) \*彼の突然の死は仲間を悲しくした。

(61)~(63)の意味は対応する動詞の使役形を使って表されることになる。

(64) 太郎の留学は母親を寂しがらせた。

(65) 音楽は人を楽しませる。

(66) 彼の突然の死は仲間を悲しませた。

しかし、また、(67)~(69)のように、形容詞連用形+「する」ではなく、形容詞連用形+「する」の使役形「させる」を使う場合もある。<sup>(8)</sup>

(67) 酒は今日も私を悲しくさせる。

(68) 君を不愉快にさせるつもりはなかった。

(69) みんなを楽しくさせるスタンダードジャズの恰好の例だ。

なぜ、「する」ではなく「させる」を使うのであろうか。「する」がある「状態の生起」を表すのに対し、「させる」は「動的事象の生起」を表す。<sup>(9)</sup>「させる」の使用は日本語が感情を「動的事象」と捉えていることを示すと言ってもよいだろう。しかし、「させる」はどんな感情形容詞とでも使えるわけではない。次に示す(70)(71)のように動



詞の使役形は使えても、形容詞連用形 + 「させる」は非文、ないしは座りの悪い文になることもある。

- (70) (a) \*お母さんを悲しくさせないで。  
(b) お母さんを悲しませないで。  
(c) お母さんを悲しがらせないで。  
(71) (a) ?? 今日一日、お年寄りを楽しくさせてあげてください。  
(b) 今日一日、お年寄りを楽しませてあげてください。

(67) ~ (68) のような使役文の成立条件を更に追求する必要がある。

形容詞の使役の意味の表現に使われるもう一つの形に (72) ~ (74) で使われている形容詞 + 「思いをする」がある。

- (72) 年とって、寂しい思いをしなくてすむ。  
(73) こんな悲しい思いはしたことがない。  
(74) 両親と同居したら、また嫌な思いをするだけだ。  
この表現は様々な感情を含む使役の表現に使うことができる。  
(75) 彼女に嫌な思いをさせたくない。  
(76) お母さんにはいろいろつらい思いもさせられた。  
(77) 子供に寂しい思いをさせてまで働こうとは思わない。

使役の意味は「-せる / -させる」という接尾辞によってだけでなく、「思いをさせる」という句によっても表されるということであり、形態論、構文論と言ったレベルにとらわれない柔軟な見方が必要であることを示している。

## 6 . おわりに

この小論では感情表現の文を様々な角度から考察した。しかし、言語事実の指摘に止まり、その要因の究明にまで至っていないところが多い。今後、更に考察を続けていきたいと思う。

付記：本稿は1995年にオーストラリア・ブリスベンで開かれたJapanese Studies Association of Australia の 9th Biennial Conference で発表した "Verbs and adjectives of emotion in Japanese" に修正を加えたものである。

### 【注】

- (1) 勿論、事物の性状規定には常に形容詞が使われるわけではなく、動詞の中にも動的事象の描写

ではなく、「異なる」「劣る」のように性状規定に使われるものがある。

- (2) 感情の主体は上記の制限から明らかであるので、言語的には表現されないことが多い。
- (3) この文に「らしい」「そうだ」など、モダリティが加わると適切な文になる。つまり、感情形容詞の主体にかかる制限は感情の直接表出にのみ適用する。
- (4) 鷺見 (1994) 参照。
- (5) 接尾辞「-がる」を持つ動詞と違い、「心配する」「楽しむ」等は次のように話し手自身(一人称)を主体とする表現も成り立つが、形容詞による表現のほうが感情の直接表出という意味合いが強いように思われる。
  - (a) 卒業式の日には雨なんじゃないかと {心配です / 心配しています}
  - (b) 大学生活は楽しいです / を楽しんでいます
- (6) 詳しくは井上 (1995) を参照されたい。
- (7) この記述があてはまらないものに「悩む」と「悩ませる」がある。次の例に見られるように前者が精神的な問題を表現するのに対し、後者は肉体的な問題に言及するときに使われる。
  - (a) 彼女はボーイフレンドのことで {悩んで / \*悩まされて} いる。
  - (b) 私は花粉症でこの時季になると目のかゆみや鼻水に {悩まされる / \*悩む}
- (8) これらの例は定延 (1991) による。
- (9) 寺村 (1982 : 292 - 3) 参照。

#### [ 参考文献 ]

- 井上和子 (1995) 「他動性と使役構文」『言語変容に関する体系的研究及びその日本語教育への応用』平成6年度科学研究補助金(一般研究(B)) 研究結果報告書 109 - 136 .
- McCawley, Akatsuka Noriko (1976) "Reflexivization: A Transformational Approach" in M. Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics: Japanese Generative Grammar* New York: Academic Press 51-116.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- 大曾美恵子 (1987) 「誤用分析5 結局ぎりぎりになってしまったから、電車の中で私は立たせられました」『日本語学』第6巻第1号 131 - 134 .
- 大曾美恵子 (1992) 「目が覚める」と「目を覚ます」の用法」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第2号 13 - 20 .
- 定延利之 (1991) 「SASE と間接性」仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 123 - 147 .
- 鷺見幸美 (1995) 「動作性状態動詞のル形とテイル形: 「擬態語 + する」動詞を中心に」名古屋大学大学院文学研究科修士論文
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版